

三島由紀夫
全集



4

三島由紀夫全集



4

監修／石川淳 川端康成 中村光夫 武田泰淳
編纂／佐伯彰一 ドナルド・キーン 村松剛 田中美代子

新 潮 社

三島由紀夫全集第四卷

昭和四十九年一月二十日印刷

昭和四十九年一月二十五日発行

著者三島由紀夫

発行者佐藤亮一

装幀者杉山寧

三島由紀夫

発行所株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一

電話東京(〇三)二六〇一二二一 振替東京八〇八

定価二五〇〇円

第九回配本(全35巻・補巻1) 落丁本・乱丁本はお取替えいたします

Copyright © 1974 SHIZUE HIRAOKA, YOKO HIRAOKA Tokyo Japan

三島由紀夫全集 第四卷 目次

純白の夜	七
愛の渴き	一七
青の時代	三六
解題	五九
校訂	五五

三島由紀夫全集 第四卷 小説 (4)

純
白
の
夜

世間一般できかれる村松夫人への批評は、「お高くとまつてゐる」といふことだつた。可成永く彼女とつきあつた人でも打ちとけきれないものが郁子にはあつた。深い附合をひけらかす穿つた觀察、たとへば「世間では悪黨だと思はれてるがああ見えても善人なんだよ」とか、「あれでなかなか氣の弱い一面があるんでね」と謂つた觀察を、にべもなくはねかへすやうなものが郁子にはあつた。

誰の罪だつたらう。このやうな先入主に動かされずに郁子を見れば、その美しさには心安い美も含まれてゐることに氣づく筈だつた。折ふし氣のきいた冗談も云つた。言つたあとからすぐ暴れてしまふ無邪氣な嘘もついた。歸らうとする客は十分に引き止めた。親しい友達が病氣になれば見舞を缺かさなかつた。附合ふ人たちの吉凶禍福をよくわきまへ、結婚と誕生と榮轉には情愛にみちた祝辭を、失戀には見て見ぬふりを、不幸にはみごとな弔辭を、いつも手ぬかりなく用意してゐた。……しかるに、これらすべてのことが、どことはなしに誠意を缺いてゐるやうな印象

を人に與へた。一番わるいことには嘘でさへが、誠意を缺いた嘘のやうにきかれたのである。

たえず人に與へるこの普遍的な印象、「どこかしらお高くとまつてゐる」といふ印象は、——
そしてともすれば、それが誠意の缺如から來るらしいといふ印象は、—— 郁子の精神の或る微妙な怠惰のなせるわざであらうか。

良人の村松恒彦つねひこは一向かうした批評に氣づいてゐなかつた。昭和二十三年の秋の一日、たまたま日曜日にんじつが黄道吉日に當つたところから、東京會館別館で行はれた恒彦の學校友達の結婚披露のお茶の會に、二人は出席した。そこで恒彦の銀行の同僚である澤田に會つた。會が果ててからも澤田がついてくるので、三人で有樂町でお茶を飲んだ。街は暮れかけてゐた。恒彦がちかくのS畫廊エム・エス・ギャラリーにドラクロアの良いデッサンが出てゐるさうだから見に行かうと提唱した。三人はまだがらんどうの焼け跡をさらしてゐる泰明たいめい小學校前のS畫廊へ立寄つた。

「僕は繪がわからんのでねえ。しかし繪を見るのは實に好きなんだ」

澤田は腕を組んでマチスの火事のやうな女の肖像と睨めつくらをしてゐた。

何だつてわざわざこんなことを言ふのだらう、繪がわからないといふことを見榮にしてゐるのかしら、それとも相手ほしさに私たちについてくる照れかくしか言譯のためかしら、郁子はロダンの塑像から目を轉じて澤田の背中を見た。この暇ありげな獨り者は、よく村松家へあそびに來ては、郁子のピアノをきいて欠伸おとげを洩らしてゐた。それが彈いてゐる郁子にも氣配でわかるのである。そのくせ、澤田は村松とふしぎにうまが合つた。坊ちやん育ちにあり勝ちな、抵抗のない友情を求めたがる村松の性格が、澤田のやうな男を必要とするのかもしれない。

一言にして云へば、澤田は役を辨わきまへないといふ御愛嬌をもつてゐた。人生で彼のやうな立場に置かれたなら、誰しも洒脱な皮肉家か餘儀ない道化者に自分を装ふ必要を感じさうなものだつた。ところが澤田はさうではなかつた。彼にはユーモアの才能も機智の才能もまるつきり缺けてゐた。この男は尤もらしい顔つきで仕事と友情を處理しながら、旁かたがた々々ラヂオや時計の修理が巧かつたり、妙なところに顔が利いて芝居の機敷がとれたりするところから、結構重寶がられる種類の人間だつた。

「ドラクロアは出てゐないね」

恒彦が郁子の耳もとでかう言つた。

「出てゐませんのね」

郁子は自分の意見といふものを持たなかつた。

S 畫廊は恒彦の父の代から村松家と關係のある畫商である。戦時内閣に商工大臣をつとめて戦争中に死んだ萬事に抜け目のない村松則彦のりひこが、銀行員の息子が財産税支拂から免かれた大觀や栖鳳の大幅を、佛蘭西近代繪畫のデッサンと交換するけちくさいやり方を見たら、さぞかし慨嘆したことであらう。村松則彦にとつては大きいものだけが尊いので、前大戦當時のこの船成金は、死ぬまで井のやうな茶碗で御飯をたべてゐたものである。

ギャレリイの片隅で半分居眠りをしながらお客を監視してゐる學生は、臨時雇とみえて恒彦の顔も見知らぬらしく、恒彦に命ぜられて不承々々立つて若主人を呼びに行つた。若主人が出て来て、三人を小部屋に案内した。ドラクロアはもう賣れてしまつたのかと恒彦がきいた。

「はあ、早速賣約濟になりまして。丁度眞向きの品でございましたので——眞向きといふのは、注文にはまつたといふ程の意味である。

「どのくらゐしたの」

「十七萬でお話がつきました。まだお渡ししてないので、繪はここにございますよ。ごらんになりますか」

持つて來たのを見ると、「ドン・ジュアンの難船」のためのデッサンと思はれる船べりにつかまつた亡者の粗書きであつた。郁子は良人のうしろからおづおづと畫面をのぞきこんだ。

「これは本物だ」と恒彦が言つた。

「東大の霧島先生もこの間ごらんになつて、いいものだと言つてました」

「誰が買ったんだらう。目がある人だな」

「楠さんと仰言る方ですが」

「楠？ それぢやあ、あの楠だ」

恒彦は郁子の同意を求めるやうにかう言つた。しかし郁子は何も思ひ出さない。さういふ人には會つたことがないと彼女が言ふので、良人は一瞬妻が白を切つてゐるやうに思つた。よく考へると郁子はまだ廿二歳で、戦前の避暑地や東京での廣い附合も知らずに廿歳で恒彦の妻になつたので、楠を知らないこともありうるのだつた。

「何ね、僕の學校友達で、最近また附合ひ出した男だよ。僕の銀行とそいつの會社と取引關係が出来たのでね。とにかく、すばしいことこの上なしといふ男でね。ドラクロアの好いものが出

てゐるさうだと楠に話したのは、たしか一昨日をなのに……」

彼は簡單にかう説明した。

「金のある奴は羨ましいな」

多少自分の貧乏を銜てふ氣味のある澤田が言つた。ところが彼は、貧乏を銜ふほどの金持でもないのである。

「金があるからといふわけぢやないんだよ。楠はどんな滅茶をするやうに見えても、ちやんと帳尻を合はせてゐる男なんだ。見ててごらん、買つたドラクロアを見飽きると、今度は甘萬ぐらゐでまんまと誰かに賣りつけるから」

郁子は席を立つて、陳列室へ戻つて、一人で繪の夾なかに立つてゐた。何氣なしにするかういふ動作が、彼女がお高くとまつてゐると人から言はれる原因の一つだつた。別段良人の退屈な人物論をうるさがつて立つたのではない。良人一人が彼女の行動の何氣なさを知つてゐる。およそ夫婦の間にかうした了解の完全さがありさへすれば、第三者の批評が何だといふのか。

郁子は人が頭から美人だと決めてしまはざるをえぬやうな化粧や服装をしてゐるために、生れながらの美しさの幾割かを、己れ自ら割引いてゐる傾きがあつた。その美しさは素のままの唇だつた。しかるに彼女は米國製の口紅をやや濃い目に引いて、唇の素肌の茜色を隠してゐた。その美しさは洋館に生れて育つて疊の生活にいちめられない流麗な脚線であつた。しかるに彼女は、この夏以來徐々に流行はりだしながらまだ物めづらしい長目のスカートでこれを隠してゐた。

郁子が隠してゐるのは、雷たに外觀ばかりにとどまらぬのかもしれないなかつた。苦しみを知らぬ安

穩な生活のかけに、苦しみのみが發掘してみせる心情の稀な美しさを、彼女は隠して、はては忘れてゐるのかもしれないかつた。このモダンな假装の下に、感情の激湍を氣輕な生活の田畑へ灌漑するすべも知らない古めかしい情熱的な女が、まどろんでゐるのかもしれないかつた。と謂つて自分をいつはつてゐるわけではない。自分をいつはる努力にすら耐へがたいほど、彼女の精神は怠惰を愛してゐたのである。

若主人に送られて村松と澤田が陳列室へ出て來たとき、郁子は立つたまま手提から鏡を出して顔を直してゐた。澤田が言つた。

「まるで奥さんも繪のやうだね」

恒彦はこの月並な感想をからかつてやる義務があつた。

「郁子が君のワイフだつたらさうは見えまいがね」

郁子は手提を閉ぢて、恒彦と軽い目くばせを交はして、彫刻のむかう側から出口のはうへ向つて歩いた。

恒彦が言つた。

「ぢやあ、澤田君、ここで失禮。家内と晩飯を一緒にする約束があるんだ」

今しがたの噂話にはきこえぬふりをした郁子が、この別れの挨拶をきくと、夜の戸外へひらかれた出口のところで、手袋をはめながら澤田のはうへ振向いて、漂ふやうな微笑の會釋をした。